

光 文 社 時 代 小 說 文 庫

伊東一刀斎

上

長編剣豪小説

戸部新十郎





光文社文庫

書下ろし／長編剣豪小説

伊東一刀斎（上）〈孤の章〉

著者 戸部新十郎

1989年10月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫

印刷 大日本印刷

製本 大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Shinjūrō Tobe 1989

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71030-1 Printed in Japan

光文社文庫

江苏工业学院图书馆

文庫書下ろし／長編刺豪小説

伊東 刀 齋 藏 書 章

戸部新十郎



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

伊東一刀齋

上卷
孤の章

目次

ト^{ぼく}伝^{でん}

七

山百合

四〇

犀^{さい}川^{かわ}

七〇

生^{いく}太^{たち}刀

一〇三

水^{みず}鏡^{かがみ}

一三三

氷^{つら}柱

一六五

小太刀

一九五

都の花

二三〇

曜^{よう}変^{へん}

二五九

弘^{ひろ}利

二九〇

一刀齋^{あしおと}の跽音

三二五

ト伝

一

塚原ト伝は、生涯に三度、廻国の旅に出ている。

自己修行のための若年時と、創始し、構成した自流“新当流”の弘布をめざす壮年時と、そして功成り名遂げた晩年時と。

もつとも、兵法者の生涯は、死ぬまで修行である。功成り名遂げるということはない。が、兵法数寄の將軍家や大名家は、競ってかれを招いた。ト伝また、乞われるまま、赴いて滞在し、術技を教授したり、兵法譚を交わしたりした。

かれらは、ト伝の往来のつど、送り迎えのため人数を出し、乗替馬を用意した。道中の無聊を慰めるのに、鷹を据えてくれることもあった。

もはや一個の大名格だったと思わねばならない。

永禄七年秋、ト伝は將軍足利義輝の御所を辞した。そのまえは伊勢の国司北畠具教のもとに

おり、これから近江日野の蒲生定秀のところへ行く。

おりから紅葉の季節である。義輝は、

「叡山をめぐるのも一興きよう」

といい、居合わせた横川よかわの僧で覚念坊という者を、案内につけてくれたので、卜伝は供を先にやり、覚念と二人、気楽に山に登った。

宿坊で一泊、朝、山中を觀賞しながら堅田かただへ下りた。そこから琵琶湖の対岸、木の浜まで十八町の渡しを船で行くつもりである。

ときに卜伝は、七十を一つ二つ、越えている。そのころの常識としては、たいそうな年寄りだが、矍鑠かくしやくとしていた。

裁付たうつけに濃茶の直綴じきとつを羽織り、頭巾をかむり、腰には脇添えを一本、差し、細い杖を突きながら、ひよいひよいと歩く。湖面を渡るさわやかな風に吹かれ、心地よさそうだった。

浮御堂うきみどうが見えた。

「横川の恵心僧都えしんそうずの創めましたものでありますのに」

覚念坊はこういつて、口をつぐんだ。

その湖中に架けた小閣は、だいぶ荒廃している。閣中に納めた千体仏も、少しずつ持ち出されていゝらしい。それが悲しかったのだろう。

「しかし、落雁らくがんの名所などころです」

と、覚念坊は自らを慰めるようにいった。近江八景のうちの「堅田ノ落雁」である。

ト伝はさりげなく、

「湖賊の名所でもある」

と応じた。

むかし、堅田は湖賊の庄だった。地侍層の殿原衆、商人、農漁民層の全人衆、以下、間人、タウヒト、譜代、家人、下部などの階層があり、「惣」を組織して一口に「堅田衆」といわれたものである。

かれらは、「上乘（運送）」「漁業」「造船」の湖上権を掌握したが、なにせ、堅田は瓢のくびれのようなところで、湖上の関門だった。北国から年貢米が京へ運ばれるとき、その関で水先案内を名目に、関料を徴収した。

米十俵に対し一俵、つまり一割だから、これは大きい。聞かねば襲撃する。当初から狙いつけて、掠奪してしまふこともあった。湖賊といわれても仕方ない。

その性、精悍で剛勇、すぐ頭上の比叡山の権力にも、容易に屈しない。独歩の姿をとった。畿内と北国を結ぶ湖上の動脈を扼する堅田衆に、みな怖れをなした。

ここはまた、一向宗が古くから根づいたところだった。京都大谷の本願寺を、山門衆徒に破却された蓮如は、応仁元年、ここへ宗祖親鸞の「御影」を移した。一向宗布教の本拠としたのである。

かねて堅田衆の横暴を憎んでいた山門衆徒たちは、蓮如の堅田入りにかこつけて急襲し、ま
ちじゅう焼き立ててしまった。

これを俗に「堅田大責^{おおぜめ}」というが、以来、惣の団結力が乱れた。特権らしいものも消^うせた。
いまはただ、商売や農漁業、船子^{ふなこ}の仕事にたずさわっている。が、強悍不屈の気性は、いま
もって受けつがれている。

ト伝はそんなことを承知していて、「湖賊」という言葉を出したのだらうが、戯^{たわむ}れたわけ
はない。

浮御堂のあちらに、つまらなそうにしゃがんでいた若者が、ふと立ち上がり、二人の傍へ歩
きかけてくる姿は、なにやら湖賊を思わすものだった。

髪は禿^{かむろ}に切り廻し、黒っぽく短い帷子^{かたびら}に、なぜか赤い帯を締め、陽焼けした脚をさらして
いる。変わっているのは、木剣を一本、差し込んでいることだらう。

若者は近づいてきて、ぶっきらぼうに、

「乗らんか」

と声をかけた。

野太^{のどと}い声であり、眼玉がくわっと見開かれている。なにか脅^{おど}して船に乘せようとしているか
のように見える。

「見ろ、やはり湖賊だ」

と、ト伝は覚念坊に、おかしそうにささやいてから答えた。

「乗せてもらおう」

若者はうれしそうにうなずいた。ぷくりと笑窪えくぼが浮かんで、思いもよらないこどもこどもした愛嬌がある。

それに、背丈は大きく逞たくましいものの、ずっと年若のようだ。まだ少年とよぶべきかもしれない。「こい」

と少年は前に立って歩いた。ト伝は素直にあとに続き、覚念坊はいくぶん不安げに、そのまたあとに続いた。

少年は松原に下りた。向こうに石垣囲いが見える。船溜まりなのだろう。

すると、横合いの松の蔭から、いきなり二つの人影が現われた。一人は少年よりいくらか年上の、弱々しげな若者であり、いま一人は三十ばかりの男である。

袴をつけて二本、差し、手に木剣を握っている。牢人者ろうにんのようだ。

「やあ、また出たか」

少年は頓狂に叫んで、振り返った。

「ちよつと待ってくれ、手間はかけぬ」

それから、腰の木剣を抜きあげると、松林の中の砂地を駆け出した。牢人者が追いかけた。

連れの若者は、木蔭にひそみ、顔だけ出して見守っている。

理由はわからない。が、どうやら相手の若者は、少年を打ち負かすために、牢人者を雇ってきたらしい。また出たか、というところをみれば、なんだか同じことが繰り返され、かつ打ち負かし得なかったのだろう。

あちらへ走って行った少年が、右手から現われた。牢人者が追ってくる。少年はさらに、木と木の間を走り廻った。

奔命に疲れさせようというのだろうが、牢人者もさるもので、少年の現われ出そうなところへ駆け寄って待ち受ける。少年が察して、別のところへひよいと顔を出す。

なんでもなさそうだが、ト伝にはたいそう面白かった。かれが印可者に与える「高上唯受一人秘術」には、

〈敵ヲ近ヅケルベカラズ。敵ニハ近ヅクベキコト〉

の一条がある。

それは間合いのことである。じつさいには、そんなうまいわけにはいかない。しよせん、敵に斬られるところが斬るところ、という覚悟だが、その覚悟をもてば、結果として、敵を寄せず、こちらは近づいていることになる。

が、いまはどうやら、形態のうえからいっても、少年のほうがそうなりつつあった。我流だろうが、闘い慣れていると思った。

いつのまにか、追われている少年が、牢人者を追い廻す恰好になった。牢人者は早く立ち合

いたいと思うあまり、ときどき立ち止まる。立ち止まると、少年が近寄ってみせる。そのたびに、牢人者は木剣を斜めに振り上げる。

これは要するに、追い込まれた証拠である。ひいては、少年だけが相手に近づくことが可能だろう。

やがて少年は、つかつかと進み出た。ト伝はほんの少し、身を乗り出した。勝負に出たのがわかったからである。

少年はしかし、さらに小癪な真似をした。追い込んでおいて打ち出さず、相手の打ち込みを待った。

牢人者は我慢し切れず、びっくりするような大声を出して打ち込んだ。それをきっかり見切った少年が、ひたと拳を打った。

鈍い音がした。たぶん骨は砕けたのではあるまいか。牢人者は呻いて、その場に輾転と転げ廻った。

「すんだすんだ」

少年は木剣を手挟み、何事もなかったように、ト伝らに声をかけた。

二

きらきらと湖面が輝いていた。小早とよぶ船が、少年の漕ぐ櫓の音とともに、その湖面を割

って進んだ。

「よいものを見せてくれた」

ト伝がいうのに、

「なにが」

と、少年はふたたびぶつきらぼうなかれに戻った。

「いまの立ち合いのこと」

「ありゃあ、喧嘩だ」

そうだろう。が、内容は兵法の立ち合いである。

相手の牢人者も、人並みの腕と見た。だから、かなり上質の立ち合いだったと思う。少年が知らないだけである。

「喧嘩のとはなにか」

「女だ」

「女といつたか」

「おかしいか」

櫓を漕ぎながら、少年は眼をむいた。その表情がいつそうこどもこどもして見えた。

「いや、おかしくない」

じつはおかしかった。

「では笑うな」

「笑ってはいない」

「そいつが笑っている」

覚念坊である。

といつて、かれは笑つたのでなく、ちよつとあつけにとられていたのである。

覚念坊はそこですかさず、鳥目ちようもくを掴つかませた。現銀げんぎんな振舞いだが、心付けを貰もらつて腹を立てる者はいない。

ことに少年は湖賊の末と思われる。応仁おうにん年中に、相国寺の横川景三おうせんけいさんが戦乱を逃れて、坂本から湖東に渡るとき、湖上で湖賊に襲われ、錢を贈つてようやく助かつたという話がある。

少年はしかし、ごく無邪気な顔つきで受け取り、腹の袋に収しまうと、

「女はあれの姉あねさんでな」

少年のほうから話し出した。

あれ、というのは、弱々しげな若者のことだろう。その姉といえは、四つ五つは上になる。が、少年時代の思慕の情としては、ないことではない。

「なかなか美しい。しかし、おれらの親方筋だ」

親方筋とはなにかわからないが、支配層の家の娘だという。そんな女に憧あこがれたらしい。

「あれが怒つてな、おれを折檻せうかんしようと、さまざまな男を向けてくる。しかし、おれは負けな